

5 3 【やまんば】

あるとき、こんなことをかんがえました。

この村はまるで、作り物みたい。

神様かおぼけが作ったものにちがいない。

村の真ん中に広場がある。

その広場を取り囲んで民家がある。

川は手前から小川、中川、大川と、並行に整然と流れている。

大川橋を渡ると町にでる。

山は反対方面にあって、小山が左端に、右端に中山、中央に大山がある。

あとは低い野原の連なり。

そんなことを懐爺にいつてみたら、

「この村の山や川は、【やまんば】が造ったのですよ」

といいました。

「【やまんば】たあ、やまのばばあのことか」

「そういう言い方もありますが、【やまんば】はもともと、山や川を造る神様でした。地方によっては【やまはは】といいます。母なる山や川ということで。ところがあるとき、山は崩れ、川は氾濫するなんてことや、山川での事故が続いたのですよ。嵐は【やまんば】が造るものではありませんから、おそらく嵐を造る神様が、【やまながれ】や【かわうそ】や【ひょうすえ】をそそのかして、【やまんば】に意地悪をしたんですね」

「かみさまも、いじわるするんか」

「神様は世界中で一番意地悪なんです。なにせ人間を造っておいて、人間を死なすんですからね」

「そういうもんかのう」

「それで【やまんば】は、人間たちに追われた。人間たちは石や糞を投げつけて、【やまんば】を人間世界から追い払ったのです。それでしかたなく【やまんば】は、自分が造った山の奥深くへ逃げ込んだのです」

「にんげんも、いじわるじゃのう」

「人間は意地悪な神様が造ったものですから、本来意地悪なんですよ」

「じゃが、かいじいは、いじわるじゃないのう」

「わたしもじつは意地悪なんです。こうして金ちゃんが来てくれるたんびに、おばけの話ばかりしているんですからね」

「そらあ、いじわるのはんたいじゃ」

「ありがとうございます。意地悪な人間が、意地悪から脱皮するには、友だちを作ることです。わたしには金ちゃんがいる。金ちゃんには完ちゃんがいる。それで意地悪から、脱皮（だっぴ）できているんです」

「なるほどのう」

感心はしたけれども、興味はやはり、【やまんば】にありました。

「して、【やまんば】はどうなったのかのう」

「【やまんば】は神様にはめずらしく、親切な神様でしたが、その後は山の奥に棲んで、意地悪婆のおばけになって、ときどきやってくる人間たちを、かたっぱしからくって、くいまくって、暮らしているのです」

「おそろしいのう。せつないのう。いじわるじゃのう」

「人間がしでかした結果ですから、【やまんば】だけを責めるわけにはいきませんが」

「ならば、【やまんば】とともにだちになろう。さすれば【やまんば】もわるさせんじゃろ」

ぼくの発案に、懐爺は膝を叩きました。

「金ちゃん、いいところに気がつきましたね。でももう遅いのです。わたしが掴んだ情報では、最近村人たちや観光客（かんこうきゃく）たちが警戒（けいかい）して、山の奥に行かなくなりました。それで【やまんば】は、たべるものがないから、餓死（がし）してしまったそうです」

懐爺は遠くを見る眼をしました。

懐爺の話には付け足しがあります。

ここで紹介するには、ちょっと陰惨（いんさん）な話かとおもわれましたが、さりげなく付け足しておきます。

【やまんば】は、餓死しそうになると、山から村におりてきて、夜遊びをしていた村の娘をくってしまう。

そうして娘の皮をはがして、それを身に付け、娘になりすます。

小声の娘が、とつぜん大声になったものだから、親があやしんで、娘の寝所（しんじょ）をのぞくと、【やまんば】が娘の皮をぬいで、眠りこけています。

親が急におそいかかったものだから、さすがの【やまんば】も、いのちからがら山へ逃げたのです。

それからというもの、村の娘は、夜遊びどころか外出をゆるされず、みんな箱入り娘になってしまったので、【やまんば】は村におりてこず、また村人も観光客も山の奥には行かなくなったものだから、【やまんば】は餓死となったのだそうです。

【やまんば】は人間ばかりくわないで、山にいる兎（うさぎ）や猪（いのしし）とか、山にみのある柿とか栗とかを、くっていけばいいのにとかんがえましたが、たぶん【やまんば】は、人間をくわないと満足しなかったのだらうとかんがえました。

芋好きのぼくでも、やっぱり米のめしをくわないと、満足しないのどうように。